

随分昔から石が好きであった。

石を愛好するのは人間の趣味のうちで最終段階にはいるそうで、一般的には、酒、女、書画骨董、盆栽、石などと順序があり、最終的に石の下に入って一生を終える。とまあそういうものであるらしい。それでは、ゴルフ、マージャン、カラオケ等は一体どこに位置するのであるか――

いずれにしろ、最初から石というのはストリートすぎるかもしれない。只、私の子供の頃には、今の様な華やかな楽しみが一切なかった代り、庭石の下や、岩松の蔭、石で囲まれた築山の苔の上を、赤とグレイのトゥートンカラーの小蟹が走りまわっており、私はしょっちゅうバケツをもって小蟹をねらっていて、結果的に石をにらみまわっていたのである。

好みが決定的になったのは一九六七年の渡米の際だ。

スミソニアン博物館の人工的な光の中で私の眼をとらえたのは、世界一のダイヤモンドでもサファイアでもなく、巨大な断面の色どりもあざやかなメキシコアガート（縞状のめのう）であり、見事にそろって復元された先史時代の恐竜の化石であった。

何億年もの真実がそこにあった。

それから一年後の北米大陸横断は、フォードのギャラキシーのトラブルになやまされながらも、テキ

サスのシダやハマグリ、魚、ペトリファイドフォレストの赤い立木の化石、ユタ州のアンモナイトや直角石、グランドキャニオンの三葉虫と食費を切りつめて集めていった。だが、後に日本中の子供たちを夢中にさせたゴジラ等の原型、ディプロドクス、ステゴザウルス等の大型恐竜の化石や始祖鳥の化石は、見るだけで、いっそううらめしい様なものだった。私はまるで飢えたようにそれを欲しがった。私だけでなく、その頃の日本人は皆いつも何かに飢えていた。物質のみか心においても、飢えはすでに一つのエネルギーを形成するまでになっていた。

日本に帰ってからしばらくは、只、生活のための実質的な戦いが続いたが、やや落ち着いたところで、化石をもとめて弥高山攻略にとりかかった。

この付近は中生代の地層の上に古生代の石灰岩がのるといふ、変化にとんだ地層だそうであるが、私の手に入ったのは新生代のブナやカシの葉の化石で、時に小さなマキ貝やツノ貝らしきものがまじる程度だった。

まだ採集の制限のないところで、生活には追われても考えようになると良き時代なのであった。帝釈峡にも日帰りで出掛け、河原で石をころがしては水をかけてまわった。白い単体サンゴが見られた。池に面した食堂で食事したあと、古生代の四放サンゴの大きいのを頂く、赤紫色の綱目模様も美しい石である。

その他、高梁川の川床にもチェックをいれたがこれは空振り、落石注意のところでは本当に石がおちて来て車のフロントガラスにくもの巣状のひびが入ってしまった。

ある朝、新聞で西大寺のバイパス工事の為、吉井川の川ざらえが行われ、二〇〇万年前の化石が出ていると知り、即出掛けてゆく。

川床には、どろどろの泥が一ぱいで靴はめりこむわ、服にははね上がるわでそれはもう大変なものだった。だが他にもうろついている人が沢山おり、蟹や貝をふくむコンクリーションがいくつも見つかった。やすりやサンドペーパーでたんねんに磨くと、びわ色のベニサキ貝や褐色の蟹の化石が浮かび上がる。一日中磨いても五十肩にも腱鞘炎にもならず、思えば若かった。

夏休みには、秋吉台の博物館に出掛け、館員さんをつかまえて色々質問したら、そんなに好きならと奥から米粒を集めたようなフズリナ（紡錘虫）の化石をもって来て一つ下さった。古生代ペルム紀以前三億年前——跳ぶのは心だ——これこそ大正末期秋吉台地の地層に褶曲による逆転があることを証明するキメ手となった記念すべき化石である。お金では買えない贈物を私は両手で抱きしめた。帰りには目についた石材店でウミユリの白い星形の浮かび上がった紫色の石を安く売ってもらった。それはすばらしい旅であった。

だが、そののち、長い間欲しがり続けた大物の化石、瀬戸内海のナウマン象の足の完品が一万五千円で売りに出たのを買えなかった。立派な化石でコンクリートのように重かった。今でいうと五、六万円位になるだろう。労働によって得るお金の厳しさを知るようになっていた私はいつのまにかお金を惜しむようになっていたし、昔のように食費をつめてまで買うことにはならなかった。一つの飢えが終わろうとしていた。

そのころから、ヒマラヤの石だの、ベルリンの壁の石だのが加わってくる。

去年は、恐らくは最後の大物、シーラカンスの化石を買うチャンスを見送った。尻頭つきのシーラカンスは不思議なことに、マンモスの足の化石より安かったが、今では財布が勝手に文句をいうようになってきているし、常識的には大きすぎ——塩ジャケよりかなり大きい——マンモスの足よりは軽かったけれど、私が死んだ時、一緒に焼けもせず、あと始末に困るだろうと思ったのである。あと始末を考えるようではコレクションもこれで終わりかなあと流石にその夜は気がめいった。

ところが、ある日、ソレがやって来た。

明るい陽ざしが差しこむ朝、診療の半ばで、背中が痛み始めた。疲れているな、と、目立たぬようにのびをしたが、痛みはむしろきつくなり、背中というより腰のような気がする。そのうち腹痛もやって来た。三十分位で痛みはもはや暴力的になって来て、体がふるえるような感じがする。十一時頃、私は耐えかねて立ち上がった。限界だ。婦長に小声で話すと私は一切かまわずプライベートコーナーに逃げこんだ。

信じられないことだ。こんな痛みが、自分にこんなことがあるわけがない。急に嘔吐が来た。倒れこんだ私の眼に婦長や他のナースの姿が見えては消える。半分は目をつむってしまふのだ。早速つなされた点滴は早天の慈雨というか、何というか、痛み止めのせい或少し眠くなる、少しおさまると患者のことが気になる。「院長にお願いしましたから」と婦長。こういう時の声のやわらかさは体にしみるようである。しばらくして院長が顔をのぞけて、「おい、先生、検尿はやったか」と確かめるよ

うに聞く。考えてみると自分のはとんといいかげんなのである。「そうですねえ、やっぱりやりますかあ」

痛みが小康状態に入ったときコップで自分の尿を見てびっくりした。何となく中味が濃いのである。表面がもりあがっている様な感じがする。まずい。PHは五、赤血球は思ったほどでなく、何とまあ白血球があるではないか。それからベッコウアメのような小石。げー。ナースが集まって、「先生のはラーメンで出来た石でしょう」という。痛み止めをのみ足し、坐薬を用意して午後は院長の往診の間だけ仕事をしーあとは痛いから横になっていた——バカなこと——

さて、夕方になったが痛みは腰から左下腹部に固定し間欠的に激しくなる。あまりに平凡すぎるパターンに落着いたので私は絶望した。常識的には入院すべきだが、なぜか恥ずかしい気がする。出血もそれ程ではないし、様子をみようと思う。水分だけはとらねばならぬが、食欲が全くなく、昼食も夕食ものをこさないし、水一つ欲しくないのだ。

少しふらつくのみで運転は問題なかったが、家に帰っても全然変わらぬ痛み方に体中が疲れてきた。体をあげまして入浴したためである。夜中になってお腹が急にカラッポになった感じがしたが残り物は欲しくもない。ええ、いっそ、とビールをあげて飲んでみる。奇妙ににがい。こんな筈はないがとラベルを見なおす。いつものふつうのビールである。

深夜、それこそ草木もねむる丑三つ時から、気のせいかもしれぬ痛みが急に強くなって来た。とてもじつと寝てはいられず、坐薬を二つ使って、一一九、一一九と唱えてみる。緊急時のメモをしてから、押入の中の布団をとりだし、団子にして重ね、蟻塚様のものを作って、とりあえずそれに抱きついておく。

いつもの思考パターンとちょっと変わって来ている。

明け方、四時半、時計を見て私は大声をあげたくなった。

もう我慢もなにもあるものか、坐薬を追加し、ふと思いついて粉のせき止めも飲んだ。体がふわーっと浮き上がった感じと体中の疲れにうちのめされて私は横になり、つかのまを眠ったらしい。

そして目が覚めた時、激しい痛みは消えていた。軽い鈍い痛みが申し訳なさそうに左下腹部に残っている。狭いところは越したらしい。疲労が残った、しかし清々しい気持ちで私は立ち上がった。朝だ。ふつうの生活が出来る。ふつうの朝がやって来た。

出勤の時間が気になって石の排出は確かめなかった。冷蔵庫をのぞいてとにかく食べた。車にのりこんでから、はじめて、妙な石を集めたようだ——お金のかからない石だったなと感心した。運転しながら、申し訳ないが君が代を思い出す。

千代に八千代にさざれ石のいわおとなりて

子供の頃から一体石が大きくなっていくものであろうかと疑問に思っていたがやっぱり石は大きくなるんだと実感として納得していた。

うしろからトラックが追いこんで来て黒いけむりをふきかけていった。

私は車の中でのびをして、さて昼には何を食べようかと考えた。
暖かい陽の下で、頭の中にありとあらゆる御馳走が浮かび上がって来た。

約束の日

一九九一・五

木々の間をすりぬけてゆく風、野辺の花のはかない美しさを心にとめて眺めるようになるまでに、私はどの位多くの人の心の美しさやさしさを味わったことだろう。

また、それをもってしても消しかねる程の痛恨の想いを。

机の上の未整理の書類を押しやりながら、私は久しぶりのアリスからの手紙をゆっくりとひろげた。
アシュレイがクリスマスチャンプレスクールで、

Cast all your anxiety on Him, because He cares for you

という素晴らしい一節を学んで来ました。それはまた、我々の慰めでもあるのです。

ドイツ系アメリカ人であるアリスと日本人の私は夫がNIHの客員研究員になったことでワシントン郊外で知り合い、帰国後二十年後余文通を続けている。

私達が知り合った頃のワシントンは、空も木々の緑もすべて誇らしげに輝くばかりで、マグノリアもれんぎょうもまるでまぶしい程だった。

そんなある日、アリスのリビングルームで、私は、「日本人は美しい花にも悲しみを感じるようなところがある」という話をし、例として、「古の奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな」のシヨートポエムをあげた。